

# 鶏肉

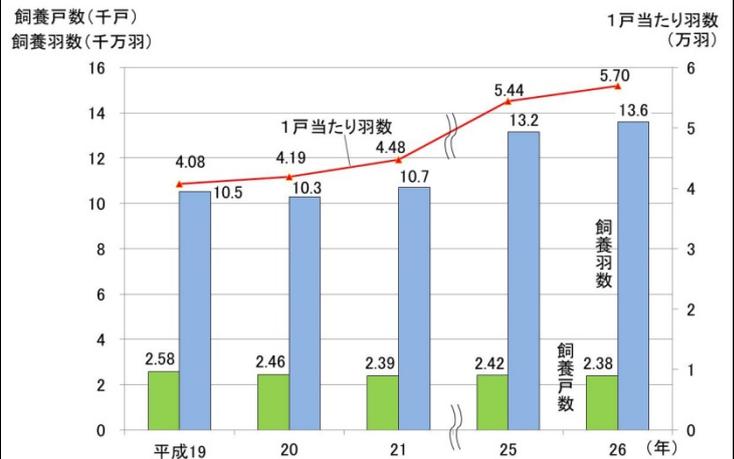
## ◆飼養動向

### 26年2月現在のブロイラー飼養羽数、3.1%増加

ブロイラーの飼養羽数は、増減を繰り返しながらも、近年は増加傾向で推移しており、26年は1億3600万羽(前年比3.1%増)となった。一方、ブロイラーの飼養戸数は、小規模飼養者層を中心に減少傾向で推移しており、26年は2380戸(同1.7%減)となった。この結果、1戸当たりの飼養羽数は5万7000羽(同4.8%増)となった。大手企業によるインテグレーションの進展や生産コストの増加を増羽で補う動きなどと相まって、経営の大規模化による生産の集約傾向が強まっていることがうかがえる(図1)。

※ 飼養動向については、21年まで農林水産省「畜産物流通統計」での公表が終了したことから、22～24年の該当データはない。26年においては農林水産省「畜産統計」で公表されているものの、調査方法が異なるため、単純に数値を比較することはできない。

図1 ブロイラーの飼養戸数および飼養羽数



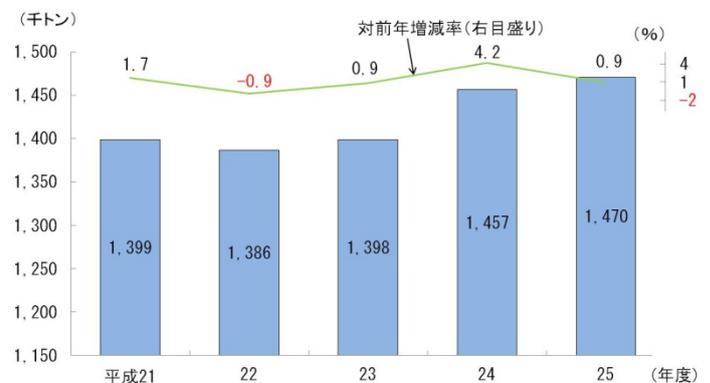
資料: 農林水産省「畜産物流通統計」、「畜産統計」  
注: 数値は各年の2月1日現在、21年までは「畜産物流通統計」、25年以降は「畜産統計」を用いた。22～24年の間は調査は行われていない

## ◆生産

### 25年度の鶏肉生産量、過去最高を更新

鶏肉の生産量は、消費者の経済性志向の高まりや20年度の中国産冷凍ギョーザ事件を受けた国産志向の高まりなどを反映して、増加傾向で推移している。23年度は、東日本大震災の影響からの回復が見られ、139万8300トン(前年度比0.9%増)とわずかに増加した。24年度は、増体能力の高い品種への切り替えや配合飼料価格などの生産コストの増加による収益減を増羽で補う動きと相まって、145万6700トン(同4.2%)とやや増加した。25年度も、他の食肉に対する価格優位性に支えられた好調な消費を受けて、147万300トン(同0.9%増)と前年度をわずかに上回り、過去最高を更新した(図2)。

図2 鶏肉の生産量



資料: 農林水産省「食鳥流通統計」  
注: 骨付き肉ベース

◆輸入

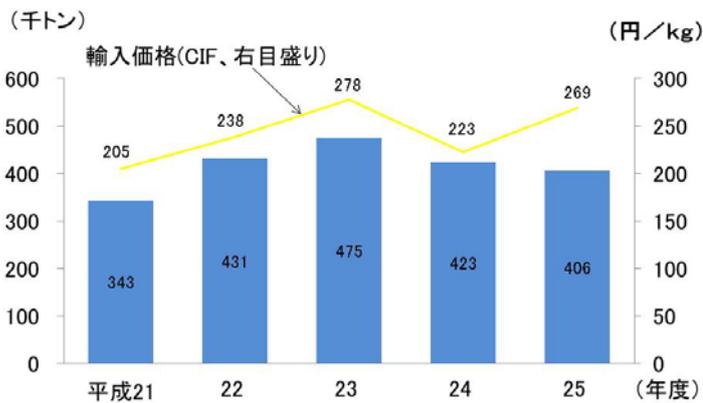
25年度の生鮮鶏肉輸入量、4.1%減少

生鮮鶏肉

生鮮鶏肉は、消費期限が短いことから、輸入品はそのほとんどが冷凍品であり、主に業務・加工向けに利用されている。

輸入量は、近年、国内消費量の3割程度で推移しており、23年度は、東日本大震災の影響により、47万5300トン(前年度比10.2%増)と、高水準であった前年度からさらに増加したものの、24年度は、現地相場高や23年度の反動もあり42万2900トン(同11.0%減)とかなり大きく減少した。25年度も、飼料価格高や人件費の上昇による現地価格の高止まり、為替の円安傾向などの影響を受けて、40万5500トン(同4.1%減)とやや減少した(図3)。

図3 鶏肉の輸入量および輸入価格



資料:財務省「貿易統計」  
注1:実量ベース  
注2:生鮮、冷蔵品を除く

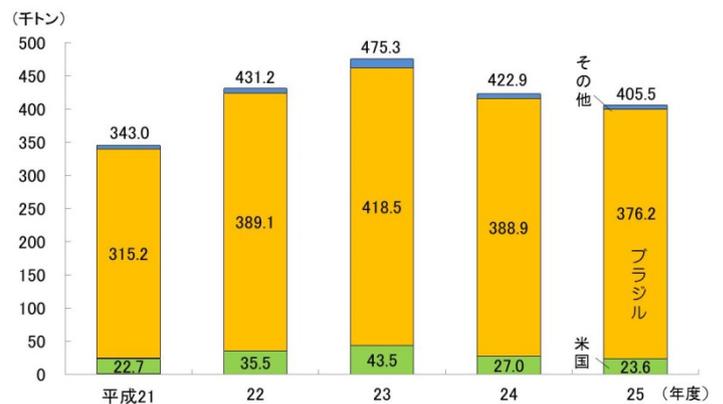
国別に見ると、全体の約9割を占めるブラジルが最大の供給国であり、米国がそれに続く。

ブラジルからの輸入量は、25年度は、飼料価格高や人件費の上昇による現地価格の高止まりなどの影響を受けて、37万6200トン(同3.3%減)と、やや減少した。

米国からの輸入量は、17年度以降、高病原性鳥インフルエンザの発生により、たびたび輸入停止措置がとられたため、2万トン台が続いている。23年度は、東日本大震災の影響により4万3500トン(同22.6%増)と大幅に増加したものの、24年度は、23年度の反動から2万7000トン(同37.9%減)と再び減少に転じた。25年度は、鶏肉調製品の輸入量の増加の影響により、2万3600トン(同12.6%減)と24年度に引き続き、かなり大きく減少した。

16年1月の高病原性鳥インフルエンザ発生に伴う輸入停止措置以降、およそ10年ぶりに輸入停止措置解除(25年12月25日付)となり注目されたタイ産は、現地の提示価格が高いほか、実需者の様子見もあり、835トンにとどまった(図4)。

図4 鶏肉の国別輸入量

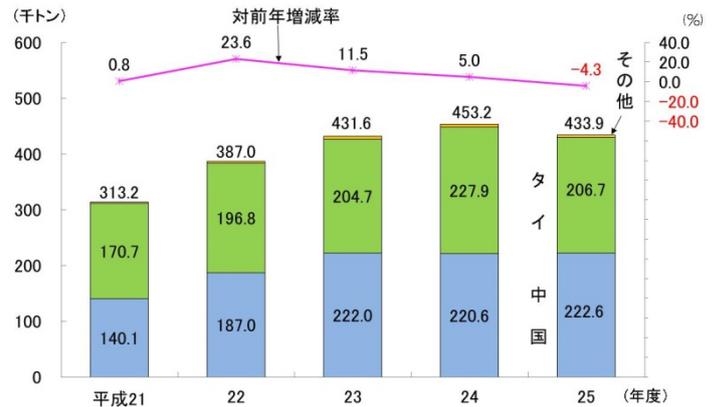


資料:財務省「貿易統計」  
注:実量ベース

鶏肉調製品

鶏肉調製品(加熱処理された唐揚げ、焼き鳥、チキンナゲットなど)の輸入量は、近年、食の外部化(外食、中食など)の進展や主要輸入先国における高病原性鳥インフルエンザの発生などを背景に、増加傾向で推移している。鶏肉調製品は、主に加熱処理施設が多数存在する中国、タイから輸入されており、23年度は、安い素材を求める外食・業務用需要の増加を反映し、43万1600トン(同11.5%増)と、かなり大きく増加した。25年度は、飼料価格高や人件費の上昇による現地価格の上昇、為替の円安傾向などの影響を受けて、43万3900トン(同4.3%減)とやや減少したものの、24年度に引き続き、生鮮鶏肉輸入量を上回った。(図5)。

図5 鶏肉調製品の国別輸入量



資料: 財務省「貿易統計」

注: 関税率番号 1602-32-290(基本関税率 8.0%、但し、WTO加盟国(中国)は 6.0%、EPA締結国(タイ)は 3.0%)

◆消費

25年度の推定出回り量は1.4%増加、家計消費は5.7%増加

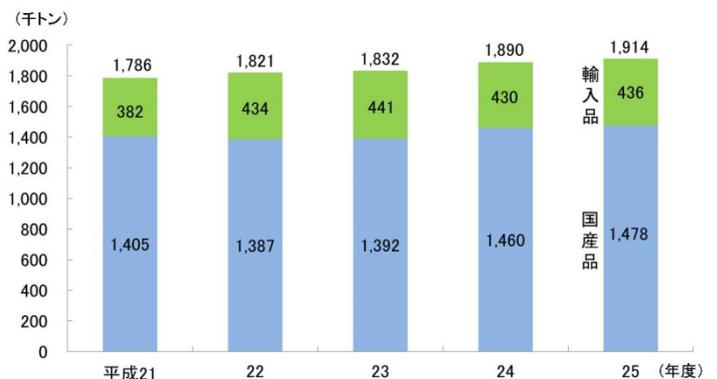
鶏肉の推定出回り量は、近年、他の食肉に対する価格優位性に支えられた需要増大や消費者の健康志向などを背景に、増加傾向で推移している。

25年度は、191万3700トン(前年度比1.3%増)とわずかに増加し、過去最高を更新した。

全体の8割弱を占める国産品は、消費者の国産志向の高まりなどを受けて、増加傾向で推移しており、25年度は148万トン(同1.2%増)となった。

一方、輸入品は、鶏肉調製品との競合や現地相場の変動などを背景に、増減を繰り返している。23年度は、消費者の経済性志向を反映し、44万600トン(同1.5%増)とわずかに増加した。24年度は、輸入量の減少に加えて、調製品との競合から42万9700トン(同2.5%減)とわずかに減少した。25年度は、43万5600トン(同1.4%増)とわずかに増加した(図6)。

図6 鶏肉の推定出回り量



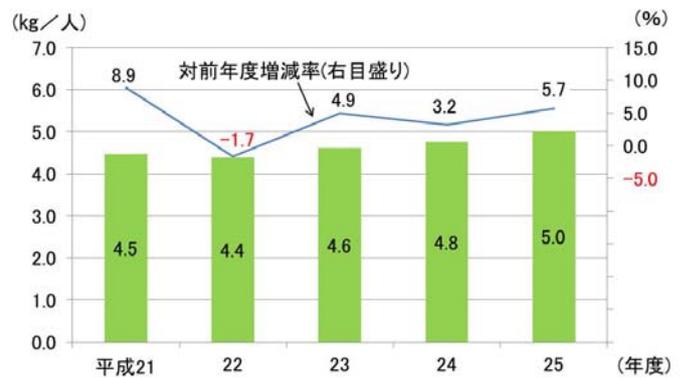
資料: 農林水産省「食鳥流通統計」、財務省「貿易統計」より  
農畜産業振興機構で推計

注: 実量ベース

家計消費

鶏肉消費量の約4割を占める家計消費量は、他の食肉に対する価格優位性や消費者の健康志向を反映し、堅調に推移している。22年度は、小売価格が前年を上回って推移したことから、年間1人当たり4.4キログラム(同1.7%減)とわずかに減少したものの、23年度は消費者の根強い経済性志向を反映し、同4.6キログラム(同4.9%増)と増加に転じ、24年度は同4.8キログラム(同3.2%増)、25年度は同5.0キログラム(同5.7%増)と3年連続の増加となった(図7)。

図7 鶏肉の家計消費量(年間1人当たり)



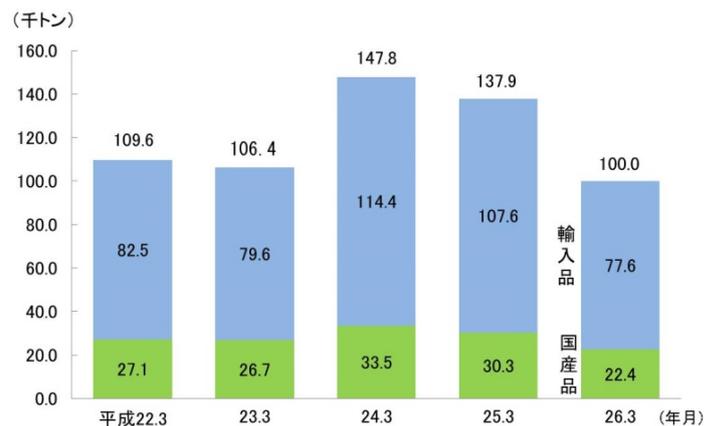
資料:総務省「家計調査報告」

◆在庫

25年度の推定期末在庫量、27.5%減少

鶏肉の推定期末在庫量は、その7割以上を輸入品が占めることから、輸入量の変動に大きく左右される。23年度は、東日本大震災後に輸入量が増加したことから、14万7800トン(前年度比39.0%増)と大幅に増加した。24年度は、鶏肉調製品の輸入量の増加や高水準であった期首在庫量を反映し、輸入量が減少に転じたことから、13万7900トン(同6.7%減)とかなりの程度減少した。25年度も、現地価格の高止まりなどにより輸入量が減少したほか、加工向け需要の増加などを受けて、10万トン(同27.5%減)と大幅に減少した(図8)。

図8 鶏肉の推定期末在庫量



資料:農畜産業振興機構調べ

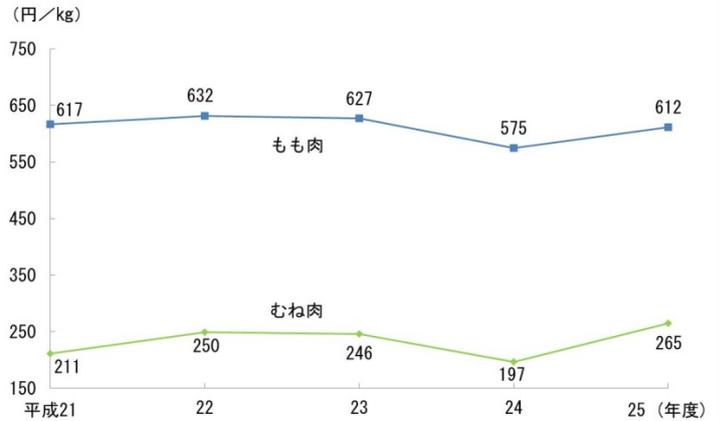
◆卸売価格

25年度の鶏肉卸売価格、むね肉は加工・業務用需要増で大幅上昇

国産鶏肉の卸売価格(ブロイラー卸売価格・東京)のうち、主にテーブルミートに仕向けられる「もも肉」については、23年度は、東日本大震災の影響により輸入量が増加したほか、後半の生産回復により供給量が増加したことから、1キログラム当たり627円(前年度比0.8%安)とわずかに低下した。24年度も、引き続き供給量が多かったことから、同575円(同8.3%安)とかなりの程度低下した。25年度は、年度後半の在庫量の減少や現地相場高や為替の円安傾向による輸入量の減少に加え、猛暑の影響や年末需要の増加を受けて、同612円(同6.4%高)とかなりの程度上昇した。

一方、蒸し鶏などの総菜やチキンナゲット、ソーセージなど主に加工・業務用利用の多い「むね肉」は、もも肉同様、23年度は、同246円(同1.4%安)とわずかに、24年度は、同197円(同20.0%安)と大幅に、いずれも低下した。しかし、25年度は、加工・業務用需要の増加により回復基調で推移し、同265円(同34.5%高)と大幅に上昇した(図9)。

図9 国産鶏肉の卸売価格



資料: 農林水産省「食鳥市況情報」、「ブロイラー卸売価格」  
注: 消費税を含まない

◆小売価格

25年度の小売価格(もも肉)、2.2%上昇

鶏肉の小売価格(もも肉・東京)は、23年度は100グラム当たり130円と、前年並みで推移した。24年度は、生産量が増加したことから、同124円(前年度比4.9%安)とやや低下した。25年度は、他の食肉に対する価格優位性に支えられた好調な需要を反映し、同127円(同2.2%高)とわずかに上昇した(図10)。

図10 鶏肉の小売価格(もも肉・東京)



資料: 総務省「小売物価統計調査報告」  
注: 消費税を含む